

## 国際養子縁組をめぐる研究とその課題

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程

芝 真里

今日、トランスナショナルに移動し交流する人々が見受けられるようになっている。国際移動者には、出稼ぎ労働者、留学生、難民、国際結婚者、帰国者がすぐに思いつき、彼らを対象とした研究も多々みられる。また、そのような国際移動者の子供たちを対象とした研究もなされている。例えば広田編(1996)や志水ほか編(2001)は、ニューカマーの国際移動者の子供たちが教育という場で直面する困難を分析しており、彼らのエスニシティやそこから生み出される差異への配慮の必要性を述べている。

国外における国際移動者の動向に目を向けると、家族とは必ずしも一緒ではなく単独で移動する子供たち——いわゆる国際養子たち——の存在を見逃すことはできない。国際養子縁組とは、一般的には非西欧諸国からの養子が西欧諸国の養親へと移動をすることと定義される(Hubinet 2006:139)。現在では年間 32,000 人以上の子供たちが送り出し国から受け入れ国へと移動しており(Selman 2002: 210)、この現象はその数の大きさ、およびその特殊な文化・政治要因による国際的移動性から、ウェイルによって「静かなる移民(The Quiet Migration)」と呼ばれている(Weil 1984)。国際養子縁組が送り出される主な要因は、戦争や貧困、送り出し国における社会福祉の欠如、そして受け入れ国側での不妊症治療や国内養子縁組の難しさが挙げられる(Lee 2003: 713)。国連の「子どもの権利条約」において、国際養子縁組の際は「子どもの利益」を第一に考慮すべきとされている。では、国際養子の関与者たちはいかに行為しようとしているのか。まず、研究においてはこの点が問われる。

### 1. 米国における国際養子縁組

最大の国際養子縁組受け入れ国である米国において、国際養子縁組にまつわる最大の関心は、養子たちの出自から生じる異質性——多様なエスニシティ——にいかに対応するかという点である。養家族は養子縁組にあたってソーシャルワーカー等による手続きと心的サポートを受け、また縁組後も「ポスト・アドプション・プログラム」を続けることとなる。このプログラムでは、「カルチャー・キーピング」と呼ばれる、養子の母国文化を保持させる内容が重要視されている。そこでは、「自分は何者であるのか」を教えることが養子の健やかな成長にとって大切であり、また養親はそのために養子の母国文化体験を共有することが推奨される(Jacobson 2008: 2)。このことは、かつて「同化」によって白人家庭で育てられたことで不安定なアイデンティティを抱えている、と主張する有色人種の養子たちへの反省がもとになっている。

筆者は、米国における国際養子縁組関係者に対する参与観察およびインタビューによって得られた語りのデータをもとに、彼らがカルチャー・キーピングをどのように捉えているのかを考察した(芝 2010)。まず養家族たちはカルチャー・キーピングを目的として定期的に会合をもち、また集住する傾向をもっていた。養親の語りによれば、彼らは自分たちとよく似た人たちと集まることを志向し、それによって自分たち「多文化家族」をノー

マライズすることができていると信じていた。つまり、カルチャー・キーピングの「場」は、言葉や文化を学ぶことだけでなく、ソーシャル・ネットワーキングとしての機能をも果たしている。その「場」は、養子や養親が排除されることなく受け入れられ、自分たち自身を「ノーマルな存在」だと思えることができ、安心して所属することができるコミュニティとなる、と養親たちは感じているのである。また養親たちは——「多文化家族」というマイノリティ・コミュニティの一員となることによって——人種差別およびマイノリティ問題一般に対する意識を向上させ、他文化への接近を試みるようになる点も見受けられた。では、欧州ではどのような状況にあるのだろうか。

## 2. スウェーデンにおける国際養子縁組

米国が国際養子縁組全体の約半数を受け入れている一方、欧州ではスペインやフランス、イタリア、オランダそしてスウェーデンを含む北欧諸国が主な受け入れ国となっている。中でも北欧諸国は国際養子の比率が高い（Selman 2002: 215）と指摘されているので、筆者自身は近々、米国との比較を射程に入れて、スウェーデンでの現地調査を行う予定である。サエテルスダルら（Saetersdal & Dalen 1990: 88-97）は、米国など有色人種のマイノリティがもともと存在していて人種差別や疎外が身近である国においては国際養子縁組に対する関心もエスニシティと結びつきがちであるのに対し、スウェーデンにおける国際養子研究は別の点に関心を寄せてきたという。それは子どもとしての成長過程そのものにおける諸問題——健康状態や学習における困難——である。これは北欧が歴史的に植民地支配から距離を置き、第二次世界大戦後に国際養子を含めた移民が本格的に流入し始めるまで、ほぼ同質な人々で構成された国であったことに由来すると言われている。他方、養親たちにはカルチャー・キーピングに関する志向も見られ、養親の多くは養子に母国文化を身につけさせたいと願っており、中には母国語が学べる学校へ養子を通わせるものもいるとサエテルスダルらはいふ。

そのような状況下、スウェーデンで近年特に問題視されているのが、移民の子どもたちや国内養子と比較した場合、国際養子の自殺率が高い点である（Borczykowski et al. 2006: 95-102）。その要因として指摘されているのは、主に外見に関わるもの——例えば求職場面での外見による人種差別や、外見と内面の不一致による不安定なアイデンティティ状況——が挙げられている。米国の場合との異同を含めて、さらなる検討が必要だろう。

## 3. おわりに

さて、多民族国家として歴史のある米国において、カルチャー・キーピングという養子に対する配慮は、確かに養親——多くは白人である——のマイノリティに対する意識変革と多様性の称賛へ繋がっていた。しかし養子たち側から語られたカルチャー・キーピングは、国際養子たちが同じ境遇の者同士で集まり理解しあえる「場」として位置づけられていた。そして養子たちは、「養親たちが養子の母国文化を尊重することは大切」としながらも、「その取り組みはまるで『人種やエスニシティをつくりだすことができる』と嘯いている」ようだ述べて、養親と養子が視点を共有することの難しさを吐露していた（芝 2010）。またスウェーデンにおける養子たちも、カルチャー・キーピングの一環と捉えられる母国語習得に対して消極的であったことが指摘されている（Saetersdal & Dalen 1990: 97）。

ここに多文化共生の困難が表れている。つまり、マイノリティに対する配慮は、単に彼らの文化を尊重すればよいのではなく、彼らの属性から引き起こされる問題をも理解することが求められているのである。特に国際養子は、養家族と同じ「現地人」でもなく単なる「移民」でもない、「二重の周辺化された立場 (double marginal)」にある(Dalen 2001: *Strategies for Coping sec., para. 1*)。米国のようにかつての人種問題で培われたマイノリティの異質性に注目する方策をそのまま流用することや、「単」文化主義にあった北欧諸国のように国際養子の異質性を十分に考慮しないことも、養子たちの「利益」を最大化することにはつながらないのではないか。国際養子との共生を考える際には、様々な事情を抱えるマイノリティ性を一般化することなく、同時に、彼らの異質性ではなく、その異質性から起こる問題に対する適切な対応が求められている。国際養子縁組研究は、このような実践的視点の探究が主要課題のひとつとなるであろう。

### 参考文献

- Borczykowski, A., Hjern, A., Lindblad, F. & Vinnerljung B., 2006, "Suicidal Behaviour In National And International Adult Adoptees: A Swedish Cohort Study," *Soc Psychiatr Epidemiol*, 41:95-102.
- Dalen, M., 2001, *The State of Knowledge of Foreign Adoption*,  
<http://www.comeunity.com/adoption/adopt/research.html> (retrieved: 6/10/10).
- 広田康生編, 1996, 『多文化主義と多文化教育』明石書店
- Hubinette, T., 2006, "From Orphan Trains To Babylifts: Colonial Trafficking, Empire Building, And Social Engineering," J.J. Trenka, J.C. Oparah & S.Y. Shin eds., *Outsiders Within: Writing On Transracial Adoption*, Cambridge, MA: South End Press, 139-150.
- Jacobson, H., 2008, *Culture Keeping: White Mothers, International Adoption, And The Negotiation Of Family Difference*, Nashville, TN: Vanderbilt University Press.
- Lee, R.M., 2003, The Transracial Adoption Paradox: History, Research, and Counseling Implications of Cultural Socialization. *Couns Psychol*, 31(6): 711-744.
- Saetersdal, B. & Dalen, M., 1990, "Norway: Intercountry Adoptions in a Homogeneous Country," H. Altstein & R. J. Simon eds., *Intercountry Adoption: A Multinational Perspective*, Santa Barbara, CA: Praeger Publishers, 83-108.
- Selman, P., 2002, "Intercountry Adoption In The New Millennium: The 'Quiet Migration' Revised," *Population Research and Policy Review*, 21, 205-225.
- 芝真里, 2010, 「多文化共生への実践と問い——アメリカにおける国際養子縁組についての語りから」, 『コ  
ロキウム：現代社会学理論・新地平』第5号
- 志水宏吉・清水睦美編, 2001, 『ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店
- Weil, R.H., 1984, "International Adoption: The Quiet Migration," *International Migration Review*, 18(2), 276-93.